

学年・実施時期

1 年

教科・科目

言語文化

7 月

単元

随筆 徒然草「奥山に、猫またといふものありて」

発問する場面

単元導入の場面

本文の音読確認の後、内容読解に入る前のタイミング

思考を深める問い

・この文章のエピソードを通して、筆者は何を言いたかったのか。

ねらい・効果

兼好法師の『徒然草』はエピソードを元に、筆者の主張したいことや人生論、自然論などが語られる文章構成となっているものが多い。この文章は、法師の失敗談、あるいは滑稽譚という形で捉えられることも多いが、現代の私たちの生き方や情報処理の姿勢などにも関わる視点が含まれていると捉えることができる。そのことを読解に入る前に生徒に提示することで、古典にも現代に通じる視点や論点が含まれていることに気づかせることができると考えた。

生徒の反応（いずれかに○をつけ、追加で説明が必要があれば記入）

思考がよく深まった（ ○ ） 思考が少し深まった（ ） 深まらなかった（ ）

（追加説明）

ペアワークで意見交換をしながら読み進めた。猫またが法師に飛びつく様子の表現が、猫またの正体を明らかにする最後の一文を踏まえた巧みな記述になっていることに気づく生徒もいた。また、うわさに翻弄される法師の様子が事件の発端であることから、情報社会に生きる私たち自身が陥りやすい状況を描いた作品であることも読み取ることができていた。

添付資料等（図や写真、URLなど参考になるものがあれば添付）